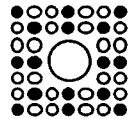


Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter

No.11

March 30, 1999



Chairman of the BCJA 就任のご挨拶

平 孝臣

このたび本年3月1日に行われましたCommittee Meetingにおいて、中村高遠会長の後を次ぐことで御指名を受けました。英国留学から帰国後10年程度で、この伝統あるBCJAの会長をさせていただくということにかなりの緊張と重圧を感じております。どうか皆様よろしく



お願い申し上げます。

以前安藤伸介先生が、関谷前会長を御推挙されたときに、「会長職を若い世代に任せるのは、先輩が自分達に確固とした自信を持っているからだ。」というお話をうかがったことがあります。このような世代交代がなかなかスムーズにいかない実社会の中で、本会は大変健全な会であると感じたものです。最近まで、まだまだ若いと思っていたのですが、丁度Blair首相が就任されたのと同じ年齢ですので、もはや決して若さを理由に辞退するという年齢でもなさそうです。

ChairmanやCommittee Memberというのは決して名誉職ではありません。責任を持って実質的な働きをしなければ何の価値もないものです。昨今の経済界におけるリストラを見ましても、現在の社会は実質的に動ける人材のみを要求しているということは明らかです。このような考えにしたがって今後のBCJAの運営というものを考えていきたいと思っております。

どの会員の方々もそうでしょうが、British Councilがあつたとき私をScholarとして選んでくれなかったら私の人生は全く異なったものになっていたと思います。その意味で選考会での面接の場面をいまでも鮮やかに記憶しておりますし、その場でつたない英語のやりとりもほとんど覚えております。現在の私は、あそこから始まったと言っても過言ではありません。このように言葉では言い尽くせないほど世話になったBritish Councilに対して、少しでもpay backしたいということでCommittee Memberに加えさせていただき、5年前か

らNewsletterの編集を担当させていただきました。今回会長職を拝命させていただきましたが、この気持ちは現在でも少しも変わっておりません。この意味で、これからはさらに若い世代への橋渡し役として奮励努力させたいだけだと思っております。どうかよろしくお願い申し上げます。

Constitutionの改正について

中村高遠 (1997/1999 BCJA会長)

BCJA委員会では、

1) BC以外のスカラー(例えばChevning Scholar, Daiwa ScholarあるいはSwire and Cathay Scholar)として英国留学し、BCJAに入会を希望した場合の取り扱い
2) 濱村氏の事件のような会および会員の名誉を傷つけるような事態が生じた場合の対処について約2年間検討して参りました。1)については、BC以外のスカラーでも本会に相応しい人物であれば入会を認めることが望ましい、2)については、濱村氏の事件を特異なケースと考えるかどうかで議論がありましたが、最終的には安全弁として除籍勧告が可能となる条項を加えることが望ましい、との結論に至りました。そして、ConstitutionのMembershipに新たに2つの条項(5.および6.)を加えることを会員の皆様に問うこととしました。

なお、Constitution変更は、それが議題として取り上げられるAGMの2週間以上まえに会員に周知することとなっております。重要な案件ですので、予め充分検討して戴くため、Newsletter No.11でお知らせする次第です。皆様のご意向は、本年11月のAGMでお伺い致します。

4. Returned British Council Scholar, Bursars, and Sponsored Visitors, students and Visitors assisted by the British Council and British Council staff in Japan shall be eligible for membership.
5. Membership is also open to those who satisfy the academic requirements and have gained approved academic experience in Britain.
6. Membership is subject to the approval of the Committee.

イギリス人は幽霊がお好き（その3）

佐藤茂男

今回も引き続いてロンドンの幽霊譚を3話ご紹介します。出典はやはりP. Underwood(1975)です。アンダーウッド氏は、彼ほど多くの幽霊の話を目撃者本人から直接聞いている人は、現存する人間としては他にいないと言われるほどの超著名な幽霊狩人(ghost hunter)です。

(1) ハイゲイト墓地に出没する吸血鬼

ハイゲイト共同墓地には四万五千基の墓がある。この墓地は、カール・マルクスの墓のある墓地として最もよく知られている。近年、古い方の墓地（この共同墓地は新旧二つの墓地からなり、墓地の中央を通るスエーンズ・レイン通りが墓地を左右に分けて走っている。カール・マルクスの墓は、妻、お手伝いのヘレナ、孫のハリー・ロングエットの墓などと一緒に新しい方の墓地にある。墓の上に建てられている醜く、巨大なマルクスの胸像が有名だ）にある墓がいくつも、一度ならず繰り返し掻き乱されるという被害にあっている。

古い方の墓地には、チャールズ・ディケンズの両親、「ベニー郵便」を最初に導入したローランド・ヒル卿、昔のプロボクサーのトム・セイヤーズ、著名な科学者マイケル・ファラデーなどが埋葬されている。

物凄く広いハイゲイト墓地にも吸血鬼が出没すると長い間いわれてきたのは、実は古い方の墓地である。確かにここでは、多くの墓がこれまで何度も荒らされてきた。人々からはもはやすっかり見捨てられ荒れ果てた墓地の上を、伸び放題の雑草やぼうぼうに生えて互いにかみ合う葎や樹木が覆っている。このような墓地で吸血鬼が待ち伏せていることを想像することは、決して難しいことではない。地下納骨堂はバックリと割れ、日蔭で口を大きく開けたままだ。墓石は足元でぼろぼろに崩れる。まさに廃墟と腐食のゾッとする光景である。1969年、一人の男の姿が夕暮れ時に目撃された。男は、先の尖った杭棒と十字架で武装し、ハイゲイト墓地に出没すると現在でも信じられている吸血鬼を待ち伏せていたのだ。1970年には、ある墓が暴かれ、女性の遺体が運び出され、焼かれるという事件が起きた。頭部が見つからなかったが、未だに発見されていない。ある種の生け贄の儀式が開かれたことはほぼ間違いない。頭部が次の儀式用に切断されたものと思われる。人間の頭蓋骨は霊力が宿る中心部であると長いこと信じられてきており、現代の妖術者たちの儀式にとってなくてはならない重要な役割を果たしているのだ。ハイゲイト墓地に「地下墓地」があるが、その「地下墓地」に巨大な墓石が幾列も並び、棺桶が山と積み重ねられている。夜ともなれば吸血鬼漁りや、興味本位に集まってきた人たちがその地下納骨堂に入っていき、棺桶の蓋を開けたり、壁面に儀式用の、ある種の象徴物を描いている姿が見られる。

新しい方の墓地にジョージ・エリオット、ハーバート・スペンサーなど、多くの人々が埋葬されている。こちらの墓地には、より伝統的な幽霊が二つ出るといわれている。その一つは、指がすっかり骨だらけの孤独な亡霊である。亡霊はものすごく巨大な鉄の門扉の

辺りに現れ、いつまでも立ち去ろうとはしない。白布をまとい、じいっと物憂げに虚空を眺めている。こちらがあまり近くまで近寄らなければその姿は見えるが、それ以上近づこうとするとサッと見えなくなり、少し離れたところにまたパッと現れる。さっきと同じように、どこか物憂げな様子をしている。この無抵抗な幽霊と実際に話したことがあると語っている人間は、何人かいる。

もう一方の幽霊は、老婆の幽霊である。この老婆は薄い髪を背中になびかせながら、朽ち果てた墓石の間を素早く通っていき、人間などとても踏み込めそうにないほど鬱蒼と繁る雑木林や、すっかり腐食して崩壊のはげしい地下納骨堂などへスッと消える。

私は、この老婆の幽霊を同時に、しかもそれぞれ別々の地点から見たという二人の人間と会い、その時の体験を直接聞いたことがある。二人の目撃者によると、素早く動きまわるこの老婆の幽霊は、こちらが詳しく調べようとするサッと目の前から姿を消し、追いかけてようとする人間どもから巧みに身をかわすということだ。

この幽霊は自分の子供たちを殺し、ここハイゲイト墓地に死体を埋めた気の狂った老婆であると考えられている。嘆き悲しむ物憂げな老婆の霊魂は、本当は愛しているながら殺害してしまった愛しい我が子の墓を、今もこうして探し求めているのだという。

(2) ノース・ケンジントンの交差点に現れる幽霊のバス

自分は幽霊がこの世に存在する可能性があるという考えを受け入れていると、私に語った人間はこれまで多くいた。しかし、ほとんどの人間は、動物の幽霊は存在するが、最大限に信じることにしても、生命のない物の幽霊が存在するなどとはとても考えられないと思っているようだ。ところが、実際に調査してみる価値が十分ある、生命のない物の幽霊が存在するという証拠がちゃんとあるのだ。

これから取り上げる事例は、ノース・ケンジントンに現れるバスの幽霊である。

ラドブルック・グローヴ駅の近く、セント・マークス・ロードがケンブリッジ・ガーデンズと交差する四つ辻は、死亡事故が多発する危険な交差点だ。この交差点では、たとえば、第7番バスが突然ケンジントン・ガーデンズに向きを変えて走っていったとか、この辺りの道路に不案内なドライバーたちが急ブレーキをかけなければならないような状況に出会ったとか、多くの通行人がたいした怪我ではないが、負傷するというような事故が多発したとか、奇怪な事件がこれまでいろいろ起きている。たまりかねた自治区当局はついに辻角に建っていた家の庭を一部取っ払い、車が安全に通行できるようにした。

そういう対策がとられる前は、不可解なバスを見かけたという目撃者からの報告が多く寄せられていた。バスはライトをつけてはいるが、運転手の姿も車掌の姿もまったく見えない。バスの運行時刻でもない真夜中に、セント・マークス・ロードを走行していったこともあった。

またこの交差点で、車同士の衝突事故が一件ならず起きている。ある時、この交差点を車で走っていたある男性が、目に入ってきた一台のバスを避けようとした。バスは一旦通り過ぎて行ったが、彼は一体どうしたのかなと思い、後方を振り向いて見ると、バスの姿はもうなかった。

四つ辻近くにあるガソリンスタンドで働くある従業員は、「バスは随分夜遅くまで運行しているんですね。真夜中なのに、セント・マークス・ロードを走っているバスを見かけましたよ」などと話すドライバーが何人もいたと報告している。従業員自身、夜遅く一台のバスがガソリンスタンドに入ってくるのを見てびっくりしたことがあった。もう一度よく見てみると、もうどこにもバスの姿はなかった。しかも、バスがガソリンスタンドにきたような音も、立ち去る音も聞こえなかったというのだ。

ある死亡事故が発生した後のことであったが、デントン地区の検死陪審員は、やはりお化けバスが出現することを示す一つの証拠と言えるような事実を耳にした。彼は、付近に住む住民の多くがお化けバスを目撃していること、さらに多くの住民がその恐ろしい心霊現象を信じていることなどを知ったのだ。

交差点近くに住む一住民は、自分たち夫婦はこれまで少なくとも6回以上はお化けのバスを見たことがあると私に語っている。この夫婦は、夜も更けバスがもう運行していない時刻に車の衝突事故が起きたり、キューツという急ブレーキをかける音がした時などは、ああまたお化けバスに出会ったのだなと思い、でも本当にそうだったのかどうか確かめようと、よく夜中の1時過ぎ頃まで眠らずに起きていたことがあったというのだ。

また、私に次のような体験談を語ってくれた男性もいる。

セント・マークス・ロードを背にして道路を横切ろうとしていたところ、人気のまったくない交差点に向かって一台の車が近づいてきたかと思うと、突然、通路脇に方向を変えた。そして歩道に乗り上げ、そこでガクンと停止した。私は、運転していた者がきつと具合でも悪くなったのだろうと思い、車に駆けつけてみたが、運転手は青ざめブルブルと震えながら、「バスが街角をスピードを出して曲がってきたので、どうしても歩道に乗り上げてでも避けなきゃならなかったのだ」と、バスの運転手を罵り悪態をついていた。

バスはどうなったのかと聞いてみたが、バスなどどこにも見えなかった、大体、どの道路も人通りがまったく絶えてしまっていたという返事だった。

(3) ロンドン大学附属病院の幽霊

ガワー街にあるロンドン大学附属病院は、ロンドン随一の規模を誇る医大附属病院だ。この病院に、患者のみならず看護婦たちも見たことがあるという幽霊が住みついている。

幽霊は「リッジー」という愛称で呼ばれている。それは、今から70年も前に入院していた婚約者の看護にあっていた看護婦のリッジー・チャーチ嬢の名前

にちなんで名付けられた名前だと、一般には考えられている。彼女は誤ってモルヒネを過剰に婚約者に投与してしまった。それで悲しみにうちひしがれた姿の幽霊となって、悲劇の現場にこうして出没するのである。

リッジーの幽霊は大抵、附属病院の看護婦が患者にモルヒネを投与しようとする時と現れる。幽霊は自分の犯した過ちを再びくり返してはならないと看護婦たちに警告しているかのようだ。患者たちは、看護婦がやって来て注射を打とうとすると、どこからともなく現れてじっと監視している見知らぬ顔の看護婦の姿に注意を引かれたことがよくあったという。

ロンドン大学附属病院の看護婦全員がこのリッジーの幽霊を見たわけではない。しかし、リッジーの幽霊のことを知らない看護婦など一人としていない。

* * *

次回もやはりロンドンの幽霊屋敷をご案内する予定です。その一つは、男爵夫人の幽霊が出没するストランド街にある有名なクーツ銀行、もう一つは、フランス・ペーコンにまつわるヒヨコの幽霊が何度となく繰り返し出没するというので知られるハイゲイトのポンド・スクエアです。ご期待ください。

(SATO Shigeo. 東北学院大学教養学部教授, University of Wales, Institute of Science and Technology 1968/69)

はがき通信

木村精二

本誌No.4、英国音楽会の拙稿で、ローヤル・オペラに触れたのは僅かだった。今回は、同オペラ根拠地コヴェント・ガーデン大改築直前の公演から、ひとこと。97年3月、小生は25回目の訪英で、大好きなヴェルディ作曲「トスカ」の原語上演に、初めて接した。実は、同行した音楽サークル「名曲散歩の会」のメンバーが、是非ローヤルのトスカを、と機上の相手のとき発言したのが効を奏し、ロンドン到着の夜、劇場まわり。幸いにも、同月17日 SS (Saturday Special) の「トスカ」が入手できたのである。エスエス公演は、Amphi theatre席を低料金でlow-income groupに提供する。この夜の天井桟敷からの拍手は、高価な席よりずっと熱が入り、ステージ上の主役らも的確に応えた、と思う。2000年の再開時には、こうしたサービスの更なる充実が、大いに期待されよう。

(Kimura Seiji, University of London.1965/66. 76)

【原稿募集のお願い】

BCJA Newsletterは会員の皆様から広く原稿を募集しています。是非皆様の御協力をお願い申し上げます。英文、和文を問いません。ワープロ専用機の独自のもは解読困難ですので、できましたらMS-DOSあるいはMacintoshのフォーマットでテキスト形式で保存したフロッピーディスクを添付していただけたら、大変助かります。原稿はBritish Council内BCJA Newsletter編集部までお送り下さい。

「ケム川の流は絶えずして…」 (第6回)

池島大策

ブリティッシュ・カウンシルのおかげで、様々な機会を利用して英国の学問のみならず、文化・慣習なども広く学ぶ機会に恵まれた。とりわけ、生活の基本ともなっている言葉、つまり英語に関連して多くの未知のことを学ぶことができたというこは、これまでも何度かこの場をお借りして述べてきた。今回は、英語の発想と日本語の発想における相違について感じたことを自分なりの思いから少々纏めてみたい。

英語の問題は、我々日本人の発想や考え方などにも大きな影響を与えてきたように思う。日本人は、一つ一つの漢字を表意文字として、一つの意味あるものとしてとらえる（もちろん、日常ではこれらを無意識に読み書きする）が、欧米人はアルファベットを一つ一つ読んでいくのではなく単語を一つの意味のまとまりとして読み書きする。本来、原稿用紙の升目を一つ一つ埋めていくという作業（最近ではワープロで変換しつつ）と、タイプライターで一気に「だだだだ」と打ち込むという作業とは、何だか根本的に違うような感じがするのである。

また、日本語には欧米での「イエス」や「ノー」に厳密には相当するものはない（又は無数の該当可能な表現が存在する）のではないだろうか。「はい」や「いいえ」は、必ずしもこれらに対応せず、直接的な応答は他の言葉を用いることにより回避せられる場合が少なくない。従って、あるテーマに関して肯定及び否定に分かれてのディベートというものが、日本では実はあまりお目にかからないが、例えば、ケンブリッジでは何度か著名人を呼んで議論するディベートの大会や会合（ソサエティ）に参加する機会があった。そこでの激しい討論は、英語の持つ構造、考え方、話し方など、根元的なものに由来する何かがあるからこそ、成り立つのではないか、という印象を持った。これは、裁判所での原告と被告とのやりとりなど、法廷でのパフォーマンスにも繋がる何かがあるのでは、と推測もしてみたくなった。

ところで、最近のインターネットの普及は、英語（米語）文化を中心とするアルファベット文化の優勢を物語るような気がしてならない。これは、インターネットを利用してみればすぐ分かることだし、電子メールの利用に関しても、日本語を媒介とする場合に伴う困難は少なくない。ケンブリッジ大学でも、電子メールのアドレスをもらったのはいいものの、日本とのやりとりでは日本語を読みとれるソフトがなかったため、結局、同大学の持つパイン(PINE)上でローマ字によってコミュニケーションせざるをえなかったのは、隔靴搔痒であった。というのは、日本語には同音異義語が多くて、ローマ字に置き換えた場合に、文意がつかめないことが多いように思われたからである。

また英国では（そしてヨーロッパの多くの国々では）、名前の付いていない道路はなく、タクシーの運行されている都市では、運転手がすべての道路の名前を知っている、という話を聞いたことがある。それでも最近では、ロンドンではずいぶん込み入ってきたため、住所の把握にも容易ならざるものがあるらしい。しかし、

住所表示が、道路についた名前を基準として、そして家や建物などの不動産についた番号を頼りに把握可能な世界（いわば、線上の1次元的世界）と、日本のように道路に名前が付いている場合もあるが、住所表示は、丁目や番地を頼りに統一性に欠け把握の難しい世界（いわば、面状の2次元世界）とは、発想も異なるのであろう。前者は、道路を隔てて、一方に奇数番、他方に偶数番の建物が並ぶのが原則であり、従って、タクシーの運転手や郵便配達なども迷いにくいと言われる。後者は、場合によっては碁盤の目のように把握できる場合もあるが、地名、丁目そして番地や建物（アパート、マンション等等へと梓づけていく順序、そしてその秩序立ては一般人にとって必ずしも容易に把握できるものではないように思われる。前に読んだ本にも書いてあったことだが、英語の発想では、「個」としての「自己・自分」を中心にそこから外に向かって発散していくのに対して、日本語では、宇宙から地球へ、日本という国の中の東京の…、そして自分へという風に個人を「外側」から囲い込んで（梓づけて）いき、収束させる構造になっているような気がする。同様に、或るものを指示する際に、指し示すべきもの（中心）から出発して、その外側へと周囲を規定していくのが英語（又はヨーロッパの多くの言語）であるのに対して、指し示すべきものをその一番外側の環境からこのもの（中心）に向かって周囲を規定していくのが日本語の特色であると感じられる。

法律家の発想として、また、こじつけをすることを許してもらえらるなら、前者の発想はすべて「個」を中心としてその権利を重視する傾向に繋がるのに対して、後者の発想はすべて「個」を取り巻く「周囲・環境」がこの「個」を梓づけて義務を負わせることを優先する傾向に繋がるのではないだろうか、と邪推してみたくなる。そういえば、「フランス人は権利を抱いて生まれてくるのに対して、日本人は義務を背負って生まれてくる。」という言葉聞いたことがある。

上記の感想は、英国での生活や英語を使う最近の日常を参考に、言語学や英語の専門家ではない者が自分なりのささやかな印象を述べたものに過ぎない。ただ、この発想のギャップをどう克服するか、という点については、絶え間なく流れるケム川の流れを見ながら沈思黙考したり、友人たちと語り合った当時と同様、相変わらず答えが出ないままである。

(IKESHIAM Taisaku, BC fellow, University of Cambridge, 1994/95)

体外受精の先進国としての英国

石原 理

1978年7月に英国で世界ではじめての体外受精によるベビー（試験管ベビー）が誕生してから、20年が過ぎた。この技術はまたたく間に世界中に普及し、これまでに百万人近くのベビーが生まれ、数多くの不妊症カップルが子供を持つことができた。そして、非夫婦間の体外受精についての問題や顕微授精や着床前診断などその後導入された技術については、ご存じのように現在、日本の各紙誌でさまざまな見地から議論されている。

私が10年前（1989年から1991年）に滞在したロンドンのハマースミス病院は、当時から、英国でもっとも先進的な体外受精を行なう施設であった。また、おりしもDr Alan Handysideにより、世界初の着床前診断が行なわれていた。そして1990年にはHuman Fertilization and Embryo Actが成立し、初期胚を用いた研究と不妊症のカップルについて生殖技術を行なうことに対して、法的な裏付けがなされたのであった。英国は、技術的な面ばかりでなく、このような意味でも体外受精の先進国なのである。

私は現在生殖医療の臨床と研究に携わる立場にあり、この治療技術がきわめて大きなそして重要な問題点と可能性を持つものと考えている。しかし、日本においては、現在まで、生殖医療技術の応用についての一切の法的な規制や裏付けは存在しない。また、これだけ新聞などで、生殖技術に関連する問題や事件が報道されているにもかかわらず、系統的な正しい知識が多くの人々に共有されているとは思えない。

そこで、現在行なわれている生殖技術のわかりやすく説明することと、生殖技術の進歩と問題点について日英の比較をすることを座標軸のひとつとした一般向けの小著を、このたび出版する機会を得た（石原理著 生殖革命 ちくま新書、筑摩書房 660円）。もし、BCJA会員諸賢からのご批評、ご批判をいただければ、幸いです。

（ISHIHARA Osamu, 埼玉医科大学総合医療センター産婦人科助教授, Hammersmith Hospital, University of London 1989/91）

BCJA名誉会長Michael P. Barrett氏 退職記念基金募集のお願い

Michael P. Barrett氏が今年の6月にブリティッシュ・カウンシルを退職されます。同氏は、在任期間中BCJAに計り知れない貢献をして下さいました。特に、英国祭UK'98の記念出版に多大なご支援をくださり、New BritainとともにNew BJCAをアピールできたことは記憶に新しいことと存じます。つきましては、ささやかな記念品をお送り、謝意を表したいと思います。会員の皆様方からご寄付（郵便振込 加入者 BCJA事務局 口座番号：00120-8-55347）を賜れば幸いです。なお、通信欄にバレット氏退職記念とお書き下さり、4月末までにお振り込みくださるようお願い申し上げます。

日本英語交流連盟のご紹介

事務局へ日本英語交流連盟の案内が届いております。本連盟は国際共通語としての英語を通じて、国際的な相互理解と諸国民の友好を促進することを主たる目的とした、非営利、非政治の独立した組織です。本会にご興味のある方は下記へご連絡下さい。案内書などが用意されています。

日本英語交流連盟

〒107-0051 東京都港区赤坂1-5-5 富士陰ビル9階
電話/FAX 03-3423-0970

BRITISH COUNCIL JAPAN ASSOCIATION STATEMENT OF ACCOUNTS

1st April 1996 – 31st March 1997

RECEIPTS		EXPENSES	
Balance carried forward from 1995-1996	1,839,672	Envelopes	8,755
Membership Subscription (13)	130,000		
Interest on Bond	6,150		
Interest on Deposit Account	297		
		TOTAL EXPENSES	8,755
		Balance to be carried forward for 1997-1998	1,967,364
TOTAL	1,976,119		1,976,119

Deposit Account on Sanwa Bank at Iidabashi Branch	467,364
Nomura Shouken at Jyugaoka Branch	1,500,000
TOTAL	1,967,364

BRITISH COUNCIL JAPAN ASSOCIATION STATEMENT OF ACCOUNTS

1st April 1997 – 31 March 1998

RECEIPTS		EXPENSES	
Balance carried forward from 1996-1997	1,967,364	Envelopes	10,185
Membership subscription (10)	100,000	Postage for Annual Reception (1/2 provided from Newsletter fund)	129,500
Interest on Deposit Account	377	Misc. expenses for Annual Reception	25,807
		TOTAL	165,492
		Balance to be carried forward for 1998-1999	1,902,249
TOTAL	2,067,741	TOTAL	2,067,741

Deposit Account on Sanwa Bank at Iidabashi Branch	402,249
Nomura Shouken	1,500,000
TOTAL	1,902,249

編集後記

BCJA Newsletterの編集に携わるようになって6年目を迎えましたが、小学校から始まり、中学校、大学、留学などと6年ごとの節目を迎えてきたような気がしています。今回Chairmanに選ばれ、これを節目として、おそらくこれで私が担当する最後のNewsletterになるのではないかと考えております。今後あらたな編集委員のもとでさらにこのNewsletterが発展していくことを期待しております。これまで編集に多大なご協力をいただきました田中南欧子様、吉田和子様、BCのスタッフの方々、原稿をお寄せいただいた方々など関係の皆様はこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

Newsletterの編集は大変な作業だろうと思われる方が多いようですが、半年に一度この程度のことをまとめ上げることができなければ、大学教員としての資質が問われるという思いでやってまいりました。大学教員として教育、研究はもちろんですが、私の場合、高度の医療を提供していくという臨床医学の責務も担っております。また生計のため夜間は地域医療に携わる必要もあります。このような状況でNewsletterをここまで続けてこれた理由としまして、毎号の編集を通して自分の知らない素晴らしい世界があるのだという発見をさせていただくことができたからだと思っております。得てして自分の狭い専門分野に閉じこもりがちな大学人として、大変よい経験をさせていただいたと思います。

会員の皆様にはこれからもBCJAの活動ならびにNewsletterに多大なご協力をお願い申し上げます。

(平 孝臣)